

墓郷・水郷・宮郷をめぐる民俗学的考察

奈良盆地南西部・吐田郷の事例より 関沢まゆみ

A Study of Graveyard Villages, Water Villages and Shrine Villages from the Perspective of Folk Customs: the Case of Handa-mura in the Southwestern Part of the Nara Basin

- 1 はじめに
- 2 吐田郷の歴史と現在
- 3 郷墓と墓地利用
- 4 水郷と上田角之進伝説
- 5 宮郷と氏子の重層性
- 6 まとめ

【黒文摘要】

奈良盆地一帯に顯著に見られる墓郷、水郷、宮郷の集団形成については、従来の研究により、それらの一一致型と不一致型があることが指摘されているが、それぞれの結合実態についての調査は不十分なまま消滅へと向かっている。本稿は奈良盆地南西部に位置する吐田郷地域における具体的な事例に即して墓郷、水郷、宮郷の結びつきの実態についての調査と分析を試みたものである。まず、墓郷は極楽寺郷墓と九品寺郷墓との両者が対比され、樅原氏のものと伝えられる巨大な五輪塔や殿墓区画の存在が確認される九品寺墓地に対し、極楽寺墓地では吐田氏の伝承を裏付ける物的証拠には欠けている。しかし、この墓郷集団の形成については、基本的に樅原氏、吐田氏など在地土豪の寺院經營と墓地設営に周辺住民の参画がみられたものと推定される。両郷墓の共通点は、それぞれの檀家と非檀家との併存的な墓地利用であり、墓郷が近世寺檀制度以前からの伝統的な集結であることを示している。一方、相違点は、九品寺郷墓が寺の内蔵的なものとなつていて、極楽寺郷墓は寺所有の内蔵と墓郷共同の外蔵とに分離されている点で、これは住職の常住か否かという寺の運営上の歴史

的安定度に対応するものと考えられる。水郷の形成は基本的に水越川水系という自然条件に基づくものといつてよいが、それに加えて、水路開削の事蹟を伝える上田角之進伝説が共有され、現在もなおその顯彰行事が民俗として伝えられている点が特徴的である。宮郷は一言主神社を中心とする結集であるが、その内部に以下のようないくつかのタイプが析出された。第一は大字内に神社をもたらす座講と呼ばれる特權的な祭祀集団が祭祀をになうタイプ、第二は大字内にも神社を有し、両社の二重氏子として祭祀に関わるタイプ、第三は大字内の神社を優先し、一言主神社には半氏子として関わるタイプである。そしてこれらの地域的結合に対する近年の、墓郷における火葬の普及、水郷における吉野川分水の開通、宮郷における座講の解散、などという一大変化の中で特に注目されたのが、郷墓規約における「大字極楽寺地内」という文言、水郷伝承における角之進の扇型、宮郷祭祀におけるミムラサキの種子への強いこだわりであり、伝統の喪失を記憶の象徴物で補おうとする伝承の力学である。